

## 台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争 —高砂義勇隊の実態と歴史的位置—

菊池一隆

### はじめに

台湾原住民研究では、主に民族学、人類学、社会学の視点から家族構成か生活様式、婚姻、宗教、言語、および伝統文化などが追究されてきた。歴史学では対日抵抗運動である霧社事件の解明が進んでいる。換言すれば、それ以前の原住民研究も不十分であるが、むしろそれ以降の歴史研究は激減する。その結果、高砂義勇隊研究は空白のまま残されている。それは、高砂義勇隊に関する当時の直接的な史料が少ないことにも起因するのである。とはいえ、高砂義勇隊については聞き取りをベースに執筆されたルポルタージュは少なくない<sup>1)</sup>。なぜなら日本軍、南洋戦場、および戦後補償問題などと密接な関係を有する重要テーマといえるからである。実は、歴史的にも高砂義勇隊は決して放置できない。なぜならアジア・太平洋戦争期における台湾原住民の動態と構造、台湾内での原住民の位置、差別問題、および日本敗戦後の戦争責任問題などを通して原住民問題はもちろん、戦争それ自体を多角的視点から考察する手がかりを与えてくれるからである。

したがって、本報告ではこれらルポルタージュに当時の新聞や史料や私自身が実施したインタビューなどを組み合わせ、歴史的に高砂義勇隊の実態、構造、本質にアプローチ

---

1) 関連論文としては、①本康宏史「台湾における軍事的統合の諸前提」、台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』中京大学社会科学研究所、2004年があり、1900年前後に焦点を絞り、「護郷兵」→「軍役壮丁」→「軍役志願者」の展開をあとづけ、その主要対象は原住民であったとする。そして、この初期「志願兵」制度は挫折したとし、1940年代、総力戦体制下での「陸軍特別志願兵」に触れるが、これと高砂義勇隊の「志願」と混同しているのではないかと。また、ルポルタージュを基礎としたものに、②石橋孝『旧植民地の落し子・台湾「高砂義勇隊」は今』創思社、1992年、③土橋和典『忠烈抜群・台湾高砂義勇兵の奮戦』星雲社、1994年、④門脇朝秀編『台湾 高砂義勇隊—その心には今なお日本が—』あけぼの会、1994年、⑤林えいだい『証言 台湾高砂義勇隊』草風館、1998年などがあり、ジャーナリズム的なアプローチにより高砂義勇隊の南洋戦場での活動への聞き取り、台湾原住民の親日的姿勢と日本への不満という複雑な心境、および日本敗戦後に補償未払いという日本政府の姿勢を批判するなどの問題提起している。その他、⑥中村ふじゑ「霧社事件から高砂義勇隊まで」『中国研究月報』第476号、1987年10月は霧社事件後、強制移住させられた川中島の現地調査と原住民への聞き取りによる報告文がある。

したい。まず第1に、高砂義勇隊成立の背景、第2に、盧溝橋事件と高砂義勇隊の関係、第3に、「戦場イメージ」と銃後の活動積極化、第4に、南洋戦場の実相と高砂義勇隊を特攻、飢餓、病魔、第5に、日本敗戦の際、日本兵士と義勇隊員の対応の相違などについて順次論じる。史料不十分な面もあるが、その全貌解明に挑戦する第一歩としたい。なお、台湾原住民をも包括する陸海軍志願兵制度、徴兵制については、紙幅の関係から本稿では割愛する。

## I 高砂義勇隊成立の背景と志願状況

では、高砂義勇隊成立の背景はいかなるものであったか。石橋孝によれば、1896年陸軍中尉長野義虎は台湾総督府軍務局に「義勇隊」編成を上申したこと、および霧社事件の際、陸軍大佐服部兵次郎も高砂族の軍隊徴集方法を模索したことに起源があるとする（石橋孝, 1992, p. 283）。また、中村ふじゑによれば、バター半島攻略に苦戦した際、台湾軍司令部の本間雅晴中将が提起したとする（中村ふじゑ, 1987）。

それが具体化に向けて強力に推進されるのは、1937年7月盧溝橋事件以降と考えられる。その背景には、「殊に今次支那事変（盧溝橋事件）が起るや……同族先人の過去の罪状を悔い恥づると共に、……今や全島各地に『吾も日本人なり』とする者を輩出したという<sup>2)</sup>。すなわち、盧溝橋事件後、皇民化政策の推進もあって台湾原住民に「日本人」意識が高まり、アジア・太平洋戦争に原住民側も積極的に呼応する姿勢を見せた。そこで、武器を返還、もしくは与えても日本に敵対する可能性が低くなり、戦争に彼らを活用することに問題はない、と軍部は考え始めた。直接的要因は、日本軍がルソン島に上陸後、物資輸送が大きな困難であった。そこで、道路や橋の補修、軍需品輸送への「高砂族」（以下、高砂族）に対する期待が一挙に高まったのである。

では、高砂義勇隊の任務は何か。大丸常夫（第3回高砂義勇隊指揮官・小隊長）によれば、高砂義勇隊はあくまでも非戦闘員で、武器を一切所持せず、日常生活のため蕃刀を帯びるだけであった。その作業内容は武器・弾薬、糧秣などの積載運搬はもちろん、特に飛行機やガソリンの掩体、道路開設などの作業をおこなった。爆弾、炎天灼熱の下、「くる日もくる日も不平不満の一言半句すら訴えることなく、黙々として敢然任務に邁進」した（林えいだい, 1998, p. 302）。ここで、まず押さえておくべきことは、原則的に高砂義勇隊は兵士ではなく、あくまでも「非戦闘員」・軍夫であったということである。

このことは、陸軍省副官に出された「台湾人軍夫ノ身分取扱ニ関スル件、陸軍一般へ通牒」（1943年7月31日）からも傍証できる。それには、「左記団体（高砂義勇隊・台湾特設労務奉公団・台湾特設勤労団・台湾特設農業団、および右ニ準スル奉公団）ニ所属セル

2) 警務局理蕃課「時局下の高砂族」、台湾総督府臨時情報部『部報』第8号、1937年11月21日。

台湾人軍夫ノ身分取扱ニ関シ疑義ノ向（キ）アルモ其ノ身分ハ傭人ナルヲ以テ一般ニ軍属トシテ取扱ハレ度依命通牒ス<sup>3)</sup>、とある。高砂義勇隊など「台湾人軍夫」身分に「疑義」があるとするのは、当初から兵士使用を強く主張する勢力の存在を示唆する。ただし、繰り返すが、異論はあったとはいえ、原則的に「軍属」で「軍夫」身分であった。このように、高砂義勇隊は「志願」であるが、当初、軍夫としての役割が期待された。だが、戦争の推移により実質的に兵士として使用する必要性が一挙に高まることになる。

高砂義勇隊員の選抜方法は以下の通り。家庭環境、平素の健康状態、素行等を勘案して受持警官が割当人員を決定した。そして、引率警官も希望者を州（庁）警察部理蕃課で募り、適任者を選抜した（中村数内（副官）「第5回高砂義勇隊従軍記」、土橋和典，pp. 299～301）。つまり筆記による学力試験は課せられないことが志願兵制度と異なる点である。

高砂義勇隊の志願状況は盛り上がりを見せた。台東下高砂族は「南支戦線」の進展に伴い、その願いはますます高まり、500人余もが各郡役所に殺到した。志願者たちは「国家のため」に忠誠を誓い、一族、蕃社の名誉にかけて座り込んでいる（『大阪朝日新聞—台湾版—』1938年10月22日）、とする。

ただし、実態は複雑であった。まず世代、立場、経験の相違から日本、もしくは日本人に対する印象に相違があったからである。例えば、①ワリス・ピホ（日本名「米川信夫」。タイヤル族〈セデッカ族〉、川中島）の場合は次の通り。ある日、警官が兄に「第2回（第1回？）高砂義勇隊に志願しろ」といった。当時の警官には逆らえなかった。母は悲しみ（第2次霧社事件後の「帰順式」での夫殺害?）、「日本人は恐ろしい人間だから行くな」と反対した。兄は「日本人である以上、天皇陛下のため国のため死ぬ」といって聞かなかった。42年6月、第2回高砂義勇隊の募集が始まると、川中島駐在所の巡查部長が家に来て、私にも「志願しろ」と命令した。そこで、志願の血書を出した。霧社事件での「国賊の汚名というか、心の中で名誉挽回をしようと思う気持ちがあった」という（林えいだい，1998，pp. 116，129）。このように、強制的であるが、形式的には「志願」という形を採っていたといえよう。

②桃園県復興郷三光村・ロシン・タナの場合、死んだ父の代わりだった兄が第3回高砂義勇隊に志願したから、母は泣いて止めた。つまり彼の兄は家族の生活を守る大黒柱だったからである。「兵隊に行ったら畑仕事をする者がいなくなり、家の者は芋も食べられなくなる」と。それに対して兄は「青年団の皆が志願して行くのに、自分だけが残れない」という。駐在所から兄の「戦死」の連絡があった時、母は毎日毎晩、泣いてばかりいた。警察の人は「兄さんは立派な戦死だ。ザルツ社の誇りだ。兄さんは本当の日本国民だ」といったが、その後、母は自殺未遂を起こした（石橋孝，1992，pp. 246～249）。これらの

3) 防衛省防衛研究所 S18-1-3（アジア歴史資料センター C01005306500）「台湾人軍夫の身分取扱に関する件」1943年7月。

事例から浮かび上がることは、母は「反対」、息子は志願に「熱心」という構図である。

③イリシガイ（日本名「平山勇」、パイワン族・第5回高砂義勇隊）の場合、「高砂義勇隊は軍属だが、月給が37円だと聞くと、すべてを投げ捨てて志願する気になった」。低収入にあえぐ高砂族にとって破格の賃金であり（林えいだい、1998、p. 204）、現金収入が乏しい原住民にとって魅力であった。

これらに関して、2006年8月13日に私が角板山タイヤル族の林昭光（ポート・タンガ）にインタビューした際、彼は、志願が強制ではなく、部族として自ら積極的、かつ主体的に決定したと強調した。例えば、タイヤル族では、頭目が「太陽あって水あれば」と言い出した時、すべてが決定されたという。すなわち、「太陽」と「水」とは「人間の生命」を意味し、紛争解決の手段として部族が1つに団結した。高砂義勇隊を結成した時もそうであった。あの時もタイヤル族の頭目が「太陽あって水あれば」と言った。したがって、タイヤル族は一致団結して高砂義勇隊に志願したのだ。日本によって強制されたものでは決してない。自ら志願したのだ。中国大陸の連中や外省人は強制されたと言っているが、それは間違いだ<sup>4)</sup>、と力説する。前述したことと矛盾するようにも感じられるが、頭目の役割は大きく、原住民を円滑に1つにまとめあげたのは頭目だといっているのである。これら双方の事例から考察するに、警察による「志願」を名目にする強制ではあるが、それを円滑に進めるには各頭目の同意と協力が不可欠だったということであろう。

ここで表により高砂義勇隊の全体像と各回高砂義勇隊の特色を明らかにしておきたい。大隊長始め軍人ではなく、総督府警部など警察関係者に率いられた。1942年3月から44年4月まで第1～第7高砂義勇隊まで計7回派遣されている（45年第8回高砂義勇隊600人も組織されたが、海上補給路が断絶したため、南洋に派遣できず、そのまま台湾防衛に入ったため、数に入れられていない）。その人数は大体400～500人であるが、人数はまちまちで、第4回は200人、第2回が1000人、第6回は800人と多数で、合計3843人を超える。第1回高砂義勇隊（高砂挺身報国隊）は500人中、全員が同時に帰国できたわけではなく、内100人は南海支隊に加わり、残留し、その後、ミンダナオ島で独立工兵第15連隊所属となり、戦い続けることになる。生還数が「不明」の高砂義勇隊も第1回、第2回、第5回と少なくないが、死亡率が高く、とりわけ第3回高砂義勇隊は乗船した輸送船が爆撃を受け、414人中、生き残ったのは僅かに10人であった。それ以外も分かっている範囲でいえば、第6回高砂義勇隊で、800人中、半数が生還できたのはよい方であった。43年4月の第5回高砂義勇隊が遊撃戦を実施するため、陸軍中野学校出身の軍人から指導・訓練を受けることになる。

---

4) 林昭光氏へのインタビュー、2006年8月13日。

表 高砂義勇隊表

	出発年月	隊員数	生還数	備考
高砂挺身報国隊 (第一回高砂義勇隊)	1942年3月	500	?	1941年12月に編成(大隊長は台湾総督府警部, 中隊長は中屋敷警部補, 小隊長は枝元源市郡警察課員)。1942年3月23日高雄港出発, 比島ルソン島に上陸, バターン半島総攻撃に参加, コレヒドール要塞に進軍, 多数の死傷者を出す。その後, 高砂族義勇隊に台湾への引き揚げ命令が出たが, その内, 高雄州出身者100人は南海支隊に加わり, ニューギニアに行くため, 1942年7月, マニラを出発し, ミンダナオ島ダバオに到着, 横山与助大佐指揮下の独立工兵第15連隊に配属。
第二回高砂義勇隊	1942年7月	1,000	?	1942年6月第二回高砂義勇隊の募集。1942年7月高雄から出港, ニューブリテン島のラバウル海軍基地を経てニューギニア東海岸のブナに上陸。南海支隊のポートモスレービー攻撃が開始されており, それを支援。
第三回高砂義勇隊	1942年10月	414	10	隊長は伊藤金一郎。1942年10月(11月?~44年)高雄港出発。ソロモン群島で戦い, ニューギニアでは搬送任務などをおこなう。だが, 帰還中にホーランジャ沖で彼らに乗せた輸送船が爆撃を受けてほとんど全員が死亡(414人中, 404人死去)。そこで, 「幻の高砂義勇隊」とも称され, 最も悲惨な運命を辿った。
第四回高砂義勇隊	1943年3月	200	70	1943年3月15日(高雄? 基隆?) 出発。第四回高砂義勇隊・海軍特別陸戦隊200人は巡洋艦に乗船。大隊長は台北州警務部理蕃課の馬場警部, 小隊長が石丸巡查部長, 小隊長付けが野水で彼らは海軍嘱託で階級はない。2個小隊に分かれ, その下の分隊は各10人であった。パラオ島に到着すると, 約20日間の厳しい海軍式訓練が実施された。その後, ニューギニアのウエワク, カイリル島などに移動。さらにボウキヨウ島では, 1945年になると連合軍が艦砲射撃を加えてきた。8月20日ムシュ島の収容所, 日本人とは別の収容所に入れられた。結局, 第四回高砂義勇隊は130人が戦死, 生存者は70人だけであった。巡洋艦で基隆港に帰還。
第五回高砂義勇隊	1943年4月	500	?	隊長の鹿毛警部は理蕃課で山地行政に従事した経験を有す。副官の中村数内も台中州の山地駐在所教育担任。引率者16人, 高砂義勇隊員500人。1943年4月18日高雄港に集結して編成。第27野戦貨物廠の指揮下に入り, 同日, 日祥丸に乗船, 高雄を出港, フィリピンのマニラ港に軍票交換のため寄港後, パラオに上陸(日時不詳)。同島アイライ村に約3ヵ月駐留し, 貨物船に乗船, 7月25日ニューギニアのハンサに上陸。マダン野戦貨物廠配属。その中から遊撃隊の斎藤俊次特別義勇隊が編成。陸軍中野学校出身の小俣洋三, 中森茂樹両中尉から遊撃隊の訓練を受ける。

第六回高砂義勇隊	1943年6月?	800	400	1943年3月高砂義勇隊隊員800人は海軍特別陸戦隊として台中の堀内部隊に入隊。飛行場で約3ヵ月間訓練。海軍下士官の指導下で落下傘部隊の訓練、遊撃戦訓練は夜間に実施された。また、教育勅語と戦陣訓の暗唱。4月(6月?)高雄から輸送船で出発。この時、日本からの兵士800人がすでに乗船しており、総勢1600人となった。マニラ、パラオ島など経て、南方戦線の日本軍基地のあるラバウル基地に到着。ここで高砂義勇隊員はラバウル待機、ニューギニア行きとガダルカナル島の近隣のブーゲンビル島行きに分かれた。第六回高砂義勇隊員の半数が死去。1946年春、基隆に帰還。
第七回高砂義勇隊	1944年4月	429	百数十人	1944年7月高雄出発。ニューギニア、ウエワクに。第六回、第七回になると、高砂族青年は少なくなり、前回不採用者も「志願」により行けるようになった。結局、第七回は百数十人しか生還できなかった。
計		3,843		

出典：①土橋和典『忠烈抜群・台湾高砂義勇兵の奮戦』星雲社、1994年、63～64、297～299頁、②門脇朝秀編『台湾 高砂義勇隊—その心には今なお日本が—』あけぼの会、1994年、148～149、156～157頁、③林えいだい編著『証言 台湾高砂義勇隊』草風館、1998年、68、129～131、145～146、171～177、180、191、256～257、262、270、277頁などから作成。各書籍間、もしくは同一書籍でもそれぞれ書いていることにずれがあり、何回も義勇隊に参加している者や、戦死者などが多くなると、現地で合併したものもあるようで複雑である。第一回が第二回と書かれたり、それぞれが錯綜している。その上、志願兵、徴兵制による原住民もおり、さらに複雑となる。なお、③で第七回高砂義勇隊としているものは高雄出発日や実態(例えば、堀内部隊所属、戦地、その状況など)が重複しており、第六回高砂義勇隊の誤りではないか。また、1945年の高砂義勇隊600人は結局、海上補給路は断たれ、南洋に派遣できず、訓練中の義勇隊員は台湾防衛に当たることになった。したがって、回数に入れられない場合が多いが、いわば「第八回高砂義勇隊」といえようか。

## II 銃後の台湾原住民

では、ここで盧溝橋事件後の台湾原住民の動態に論を進めたい。

台湾原住民は盧溝橋事件を契機に、皇民化政策が推進されたこともあるが、繰り返すが、それまで以上に日本人意識を強め、「戦勝祈願」をおこなった。例えば、「蕃地」・原住民地域には佐久間神社をはじめ社祠、遙拝所などが65ヵ所あるが、教育所児童や男女青年団などを中心に、警察官の指導下に熱心に戦勝祈願をしている。また、高砂族青年の中には、殊に本島人が軍夫として従軍したと聞き、同じ「日本国民」でありながら何故高砂族が採用されないのか不満を抱く者も少なくない<sup>5)</sup>、という。原住民は本島人からも差別を受けていたようで、本島人に対して対抗意識もあり、平等に扱われることを熱望していた。

こうした状況下で、高砂義勇隊募集に続き、今度は特別志願兵制度施行のニュースが原住民地域を駆けめぐり、台北州立高砂族青年道場では座談会が開催された。羅東郡シキクン青年団「重松久次」(20歳)は「部落から立派な志願兵を多く出すには、蕃語使用厳禁、国語(日本語)を常用ませう」と蕃社全体で決議、もしうっかり蕃語を話したら「改心

5) 警務局理蕃課、前掲「時局下の高砂族」。

板」を持たされ、罰金がとられる（『朝日新聞—台湾版—』1941年7月14日）。このように、日本語習得にかなり力を入れていた。

高雄州屏東郡サンティモン社では、篤志看護婦志願の血書を出した女子青年団長ラブラブ（20歳）は「私たちは皆独身ですが将来同族と結婚するときは立派な志願兵といふのがお婿さんの第1条件です。皇国の軍人の妻となる日を思ふと胸が躍るやうです。やがて私たちの子供がこぞつて志願兵となつて御国のために戦ふ日が来るでせう」（『朝日新聞—台湾版—』1942年1月25日）、という。このように、結婚相手として志願兵となる原住民青年が理想像とされていった。こうした娘たちの発想を含む原住民社会の雰囲気は原住民青年の心を鼓舞したことは疑い得ない。

台湾全島では「コレヒドール島、バターン半島陥落祝賀行事」が盛大に挙行された。丁度、第5回大詔奉戴祭に当たり、全島もれなく日章旗をはためかせた。台湾神社など全島各神社では一斉に祈願祭を執行した。花蓮港を始め各地の「蕃社」でも「万歳」の歓声が上がったという（『朝日新聞—台湾版—』1942年5月10日）。いわば、この時、日本軍の勝利は原住民の勝利とイコールで結ばれたのである。

当時、日本は、台湾原住民の南方移住案も計画していた。これは、明治時代に北海道、樺太に布かれた屯田兵制度とほぼ同様な案で、熱帯に抵抗力が強く、熱帯□□（2文字不鮮明。農業？）に豊富な経験を持つ高砂族青年約1万人（家族を含む）を選抜して、農作物の栽培に従事せしめ、且つ有事の場合は銃をも執らせる。将来は彼らを南方に永住させる（『興南新聞』1942年7月31日、なお『台湾新民報』が1941年2月に『興南新聞』に改名）。換言すれば、台湾原住民に対して農業生産とともに、日本軍による南洋支配の先兵としての役割を担わせようと計画していた。

今村孤舟（『台湾警察時報』に掲載）によれば、蕃社の上を敵機襲来、また平地より「不逞漢」の侵入、「悪宣伝」ありとして、時局を認識させ、高砂族社会治安を維持統御すべき「真の力」は警察の力はもちろんであるが、そうした逼迫した事態にあつては、彼等同族の「先覚者」の力に俟つものが多いことは、従来幾多の事例が之を物語っている<sup>6)</sup>。このように、原住民地域において警戒感、緊張感をもたせ、その際、原住民の「先覚者」（この場合、日本の政策に協力的な頭目を指すことが多い）の力にやはり頼らざるを得なかったことを物語る。

ところで、当初、日本軍の南進は成功を収めているように見えた。42年10月7ヵ月の従軍を終えて帰国した高砂義勇隊（第1回）の台北州隊座談会が開催。①決してアメリカの捕虜にならず、立派な手柄を立てて帰ろう覚悟した。②バターン作戦が終わり、マリベレス山を占領した時、何千人もの捕虜が並んでおり、いよいよ「日本軍が勝った」と喜んだ。③比島北部の山奥の農民は、昔、我々の祖先がやっていたような方法で農耕をしている。

6) 今村孤舟（新竹州）「高砂族進化の現段階と志願兵制度」『台湾警察時報』315号、1942年2月号。

それと較べると、我々は「一視同仁の御聖徳に浴し、立派な農業をやっていること」が有り難い（『興南新聞』1942年10月15日）。④高雄州の第1回義勇隊員の「下村」の活躍振りは素晴らしく、アメリカ兵13人を斬った（『興南新聞』1943年5月30日）。こうした、ある面誇張された「英雄談」などが原住民青年の胸に深く刻み込まれ、銃後を盛り立てた。

では、台湾原住民の銃後の生活はどうであったか。43年末、その言動は以下の通り。①屏東郡下サモハイ社の老父は「年寄りと女さへゐれば山や田畑はりつぱに守つていく。戦地ではどんなことがあつても1歩もひくな」と諭したという。②事変（盧溝橋事件）以来、特に自覚は飛躍的に昂揚し、国防の本義、銃後の務（め）を心底から認識した。③治安を自らの手で守るため高砂族自助会を結成し、進んで防空監視の任務にあたっている。④米英に宣戦布告されるや農作にも異常な熱意を示し、夜は山のいたるところで松明まで焚いて増産している。⑤相互扶助の精神を発揮して留守家族の農耕手伝いなどをおこない、金属回収、愛国貯金なども率先協力、平地以上の成果をあげてゐる。⑥日常生活も皇民化され、住宅も風俗も日本式に改められ、かれらの和装姿を見て高砂族と見分けることは難しい。「国語」（日本語）もほとんど不自由がない。当局が「蕃」の字を一切禁止するに至ったのも当然とする（『朝日新聞—台湾版—』1943年12月12日）。皇民化、日本人化が進められ、戦争を肯定し、それに尽くすことで自らの待遇を変えていこうとする涙ぐましい努力をしていた。また、一時期、「蕃」の字を禁止しようとしていたことがわかる。

しかし、戦況悪化の中で死んでいく原住民青年は激増していった。44年6月、第1回高砂義勇隊員だけで金鵄勲章が実に「40柱」の多きを数えた（『朝日新聞—台湾版—』1944年6月25日）。高雄州屏東郡理蕃係の湯前巡查部長はバターン、コレヒドールの大攻略戦で彼等（高砂族）の強さと尚武の伝統を見た、と語る。原住民青年は極めて強く勇敢だったのである。そこで、記者は屏東郡ブタイ社を訪れ、金鵄勲章を授与された畑中家を訪問した。原住民の父は、市志が出征する時、「天皇陛下の御ために死んで帰れと言ひ渡してありました。…………それがまた今度日本人として最高、最大の名誉である金鵄勲章を頂くことになり、家門の誉（れ）」であり、「弟の正義もゐますからこいつを兄の仇討のために戦地にやりたい」。母は「なにも申（し）上げることはありません。倅もさだめし地下で喜んでゐることをごさいます」。男子青年団長は「銃後に残つてゐるわれわれ青年は畑中君につづいて戦地に行く覚悟です」。また、女子青年団員は「畑中さんのやうに義勇隊員となつて戦う人のもとへ行きたい」（『朝日新聞—台湾版—』1944年6月28日）。周知の如く天皇・日本国のために死んでいくことが当然視され、かつ家族のみならず、原住民社会全体にとって誇りとされた。それと異なる意見は公然とはいえない状況であった。

### III 南洋戦場での激戦と高砂義勇隊

では、ここで高砂義勇隊が活動する南洋戦場に話を進めたい。果たして高砂義勇隊は実



際にどのような活動をし、戦闘の中でいかなる役割を果たしたのか。

総督府労務課長山田一夫、理蕃課警視中村文治らは2週間、バターン戦線を視察して台湾に戻った。高砂挺身隊は各州から選りすぐられた500人余が自由自在に蕃刀で活躍した。兵士たちが長い銃や指揮刀をもてあましている時、彼らは自在に進撃路を開いていく（『朝日新聞—台湾版—』1942年6月6日）。つまり日本兵では対応が困難なジャングルでの進撃路を、台湾原住民は台湾山地での経験を生かし、蕃刀で切り開いていった。

高砂義勇隊の『陣中日記』はバターン、コレヒドール作戦以降の臨場感ある戦闘模様を伝える。

□月□日（□は掲載新聞自体の伏せ字）「ますます敵機の空襲はひどくなってきた。2、30機からなる敵の編隊がやってきた。この日味方の高射砲陣地から猛烈な火を吐きはじめた。ああおちるおちる、1機、2機、3機と火を吐いて撃ち落とされて行くのを隊員達は眺めた。「死といふものが眼中にない皇軍のこの奮闘振りには驚嘆の外なかつた」。

□月□日「第2次高砂義勇隊に邂逅する。……この10日間といふもの草の根で飢（え）をしのぎ、野生の椰子の実で渴（き）をいやしてゐたので隊員が持参の月桂冠（日本酒）1本と煙草とキヤラメルには自分達は躍り上つて喜んだ」。

□月□日「再会を約して第2次高砂義勇隊とお別れした。……われわれは工兵隊に協力して密林を拓き道路を造り……橋をつくるなど……苦労はなみ大抵ではなかつたが1人も落伍するものなく黙々として働いた」（『朝日新聞—台湾版—』1943年8月8日）。

このように日本軍の戦闘力への驚き、また食糧不足の中でも闘っていることを強調している。こうした話は、台湾の原住民を中心に銃後の社会を鼓舞した。

ルデラン・ラマカウ（第2回高砂義勇隊・南海支隊の歩兵工兵部隊所属）によれば、フィリピンに上陸後、機関銃射撃法など1週間の訓練を受けた。この時点ですでに兵士としての簡単な訓練を受けている。その後、1942年7月ニューギニア北岸のバサヴァに上陸後、スタンレー山脈を越えると、ポートモレスビー飛行場の光が見え、部隊の指揮は高かった。そこにはマッカーサー率いる米兵2000人と豪兵1万人が駐屯していた。日本軍の南海支隊には食糧、弾薬、医薬品が欠乏、増援部隊もなく、連日、戦死傷者と餓死者が出た。特に42年12月ニューギニア北岸の日本軍の3大拠点の1つバサヴァが米豪軍の攻撃で陥落した。そこで、43年1月歩兵部隊の中から破壊隊を組織した。枝元小隊長指揮下に高砂義勇隊から3人、日本兵13人を選抜、計17人で、米軍の大砲2門を破壊したが、部隊に戻った時、10人となっていた（土橋和典、1994、pp. 64～65）。つまり戦況の悪化にしたがい、義勇隊員は輸送任務以外に、現地自活のため食糧調達、偵察諜報、および実際に銃をとって戦闘に参加している状況が明確となる。

ニューギニア方面陸軍最高指揮官から、第1回高砂義勇隊長代理の枝元源市に「賞詞」（43年5月15日）が授与された。その授与理由として、高砂義勇隊が①空襲下でのニューギニア上陸を敢行したこと、②モレスビーに向かう山系横断作戦の先遣隊をつとめたこと、

②スタンレーを踏破，道路構築と補給輸送における役割，③ギルワ付近の戦闘で敵を撃退し，包囲網を突破して補給輸送，患者護送を実施したこと，そして④決死隊に率先して参加し，敵の砲兵陣地を奇襲，破壊などブナ作戦遂行に貢献などがあげている（林えいだい，1998，p. 66）。こうした困難で危険な任務を次々となし，かつ道路構築，補給など重要な軍夫としての役割は当然のこと，さらに決死隊になるなど，多面的活動をおこなったことがわかる。換言すれば，本来の軍夫としての役割だけでなく，やはり兵士としての役割も果たしたことが評価されている。

第1回高砂義勇隊は残留組100人を除き，ほぼ約束の期限通り帰還できたが，戦争悪化とともに各回高砂義勇隊全体の残留問題が生じ始めた。いわば第2～7回高砂義勇隊が互いに入れ替わることなく，重複して戦場におり，軍夫，もしくは兵士としての役割を果たしていたことを意味する。44年1月大丸常夫（第3回指揮官）は隊員7人を引率し，「英霊42柱」とその遺留品を台湾軍司令部に引き渡すため，フィリピンから台湾への出張が命じられた。大丸は，3月9日台北の台湾軍司令部に行き，そこで次のように陳述した。「軍人勅諭の中にも，1つ軍人は信義を重んずべしとあ（る）。……比島作戦に参加せる第1回高砂義勇隊は6箇月にして解除を見おるに反し，我々第3回義勇隊に至っては昭和17（42）年10月以来，既に1年6箇月にも及んでいる。……契約期限の実現方に関して，ご努力を願い申し上げたく……陳情せり」，と。それに対して台湾軍司令部は国運の重大事，船舶不足などをあげ，我慢を要請している（林えいだい，1998，pp. 304～307，315）。激戦地域で，かつ補給や自給が困難な中で帰還許可が出ないことは，「死」の可能性を意味する苛酷なものだった。

また，44年5月には，第18軍（安達二十三中将軍司令官）は大高捜索隊（隊長大高定夫大尉）を編成して，西部ニューギニアのアレキサンダー山系などへの出撃を命じた。大高捜索隊100人中，8割の約80人が台湾原住民であった。半年の遊撃戦を終えて第18軍司令部に帰還した。だが，すぐに45年元旦には，大高捜索隊は再編成の命を受け，高砂兵80人を主体とする遊撃隊「猛虎挺身隊」を編成し，ソナム河に出動した。イリシガイ（第5回高砂義勇隊・猛虎挺身隊）によれば，猛虎挺身隊の任務は敵部隊への潜入攻撃だった。まず敵の位置，人数，戦力，地形の詳細な調査をおこなった。そして，敵兵の死体から自動小銃，手榴弾をとりあげ，それを使用した。潜入攻撃は遊撃戦の中でも最も困難で，高砂義勇隊の勇気だけでなく，身軽さ，暗夜でも見える目，鼻と耳の敏感さ，それにジャングルを素足で歩き，音を立てないという独自の能力がかわれた（林えいだい，1998，pp. 15～16，218～220），という。このように，台湾原住民は戦闘面などで特殊な能力を発揮した。

レイテ沖開戦で日本連合艦隊は壊滅し，その結果，「生命線」とされた南方と本土間の輸送は完全に遮断された。それを打開するため各種の特攻隊が組織された。高砂薫空挺特攻隊（以下，薫空挺隊）も神風特攻隊，陸軍特攻隊と共に，太平洋戦争最初の特攻隊の1

つである。隊長の中重男中尉（大分県中津出身。陸軍士官学校卒業後、陸軍中野学校で遊撃戦専攻）以下、隊員 60 人中、台湾原住民が 48 人（この場合も 80%）を占めた。44 年 9 月米軍の大空襲にあい、劣勢な日本軍は 10 月 18 日「捷 1 号作戦」を発令し、海軍神風特攻隊、続いて陸軍特攻隊が敵艦隊に次々と突入した。そして、44 年 11 月薫空挺隊による奇襲作戦を決行することとなり、高砂義勇隊の「義」の字をとり「義号作戦」と称された。敵に察知されないため、飛行音を出さないようグライダーを使用するという奇抜なものであった。すなわち、レイテ島の戦局挽回を目指す日本陸軍の飛行機 3 機に引かれたグライダー 3 機（義勇隊員各 30 人とされるので、計 90 人？）が同島タクロバン飛行場に向かい、途中で切り離され、胴体着陸を強行して米軍に斬り込んだ。いわば薫空挺隊は大本営直轄の秘密特攻隊で、「帰らざる部隊」で最初から「確実な死」が約束されていたという。続いて 12 月レイテ戦最後の日本兵のみの決死隊 550 人による「和号作戦」が実行された（土橋和典，1994，pp. 223，225～229，233～235，237，240，244，269～272）。結局、これら特攻隊が戦局挽回できるという展望もなく、無謀な計画の下、死んでいった。

戦争末期、「玉砕命令」が出ると、参謀らは苛立ち、部下を怒鳴りつけ、殴った。高砂義勇隊は最後の斬込隊に出るといわれた。潜入攻撃と異なり、斬込隊は特攻隊であり、生還できない。そこで、義勇隊の何人かがジャングルに逃亡した（林えいだい，1998，pp. 223～224）。高砂義勇隊員は僅かでも生還できる可能性があれば勇敢に戦うが、薫空挺隊の奇襲作戦（この場合、軍上層部はともあれ、高砂義勇隊員は生還できる可能性があると考えていたのではないか）を例外とすれば、全滅が確定し、確実な死がまっている戦闘には参加しない傾向があった。

#### IV 南洋戦場の実相と日本敗戦—病魔と飢餓・「人肉食」—

戦場となったニューギニアは暑さ、湿度、スコールなど世界でも最悪の気候であった。その上、至るところで蚊、蠅、蛭、ダニ、蟻などが襲ってきた。こうした環境下で、日本兵の中にマラリア、テング熱、アメーバー赤痢、さらに熱帯性潰瘍が発生した。

ところで、『朝日新聞』（2012 年 12 月 4 日）に「声—語りつぐ戦争—」に川村茂松（大隊本部観測班長・飛行場防空警備）の投書が掲載された。それを要約すると、1943 年 5 月、南海派遣独立高射砲第 63 大隊の 1 員として東部ニューギニア・ウエワクに上陸したという。連合軍に制空権も制海権も握られ、補給の輸送が次々妨害された。川村らは空襲の合間にナスやトマトを栽培した。44 年 4 月、米軍がアイタペに上陸、出撃したが完敗した。この戦闘で日本軍は約 2 万人から 7000 人に減少した。その後は内陸に逃げ込み、戦闘もなく、現地住民に助けられ、サゴヤシのでんぷんやネズミ、ツチグモ、トカゲも食べた。栄養失調で死者が続出した（川村茂松「飢餓と病魔のニューギニア」『朝日新聞』2012 年 12 月 4 日）、と。このように、苛酷な環境下で食糧も不十分で、栄養失調のため、多くの死者が出たこ

とを回顧する。この投書には触れられていないが、高砂義勇隊はここで活動していた。そして、駐屯地域や進軍、退却行程によっても異なると考えられるが、この投書以上の地獄絵が現出していた地域も多かったのである。

では、まず日本軍、高砂義勇隊と現地人との関係はどうか。日本軍の宣撫工作ではまず現地人の酋長と友好的な関係を持つため、酒、煙草、食糧を与えたが、高砂義勇隊の仲介がなければ難しかったという。このように、高砂義勇隊はすぐに現地にすぐに溶けこんで宣撫、情報、食糧確保に威力を発揮した。日本兵では難しい現地人との融和も難くこなしたのである。日本軍は畑から農作物を公然と盗んだが、当初、現地人は不満を感じながらも一定程度許容、もしくは許容せざるを得なかった。

また、中村数内（副官・第5回高砂義勇隊）によれば、現地人がヤム芋、サゴ椰子澱粉、椰子の実、バナナ、パパイヤなどを提供し、米や食塩以外に不足を感じなかった。猟で1日に猪3頭（60キロ平均）、火食鳥（60キロ以上。走鳥類で「カズワル」とも称す）をとり、部隊のみならず、現地人にも配分した。隊員が38式歩兵銃で撃ち落とした極楽鳥も食べ、その羽は現地人壮年の髪飾り用に提供して喜ばれた。こうして高砂族を通じて、現地人の信用を得た（土橋和典、1994、pp. 305～306）。高砂義勇隊員が媒介することで、当初、現地人との関係は総じて悪くなかったように見える。

しかし、連合軍との戦闘が激化するにつれ、食糧補給が困難さを増した。そうした状況下で高砂義勇隊員は食糧確保に尽力し、多くの日本兵の命を助けた。例えば、①椰子の木に登って実を落とす作業も日本兵はできない。銃剣は人を刺す以外、役に立たず、ジャングルを進むのも、サゴ椰子から澱粉をとる作業も、椰子の葉で屋根を葺くのも、山豚（猪）の調理も、蕃刀が必要であった。食糧不足がさらに深刻化すると、義勇隊員が見つかる食糧しかなく、日本兵を「敵よりも恐ろしい飢えから守って」くれたとされる（門脇朝秀、1994、p. 106）。それに対して、②海軍兵学校出身の将校は作戦計画はうまいが、ジャングル戦には不適であった。熱帯植物は難しく、毒草と知らず食し、死ぬほどの苦しみを味わった者、実際に狂い死にした者もいる。だが、カイラル島の植物は台湾のそれと似ている。義勇隊員は鳥を捕獲すると、必ず胃の中を調べた。鳥が食べても安全なものは人間にも安全だからだ（林えいだい、1998、p. 179）。台湾原住民の智慧が遺憾なく発揮されたのである。

また、ロヘイ・タオレ（第6回高砂義勇隊、タイヤル族〈セデッカ族〉）によれば、現地人の畑を荒らして食べた。ジャングルで山豚や鳥をとってきて、分隊の仲間と分けて食べた。ラバウルは糧秣が少ないが、高砂義勇隊員は飢えるということにはなかったという（林えいだい、1998、p. 262）。義勇隊員の場合、食糧不足という危機的状況の中で助け合いの精神があり、僅かな食物でも分け合って食べた。他方、日本兵の場合、1人だけ隠れるようにして食べている者も少なくなかった。

だが、日本軍の強圧的態度から現地人との関係は次第に険悪化していく。農作物略奪が激しくなり、強制労働に動員、かつ現地人を強姦、処刑などをおこなった。例えば、強制

的に集められた現地人担送隊が逃亡した結果、義勇隊員がすべての糧秣搬送を担当しなければならなくなった。バヤン・ナウイ（第5回高砂義勇隊、タイヤル族）によれば、日本軍が畑の農作物、豚を略奪し、その上、強姦したので現地人は反発を強め、報復し始めた。その結果、現地人が豪軍情報機関に日本軍の情報を提供するようになった。また、現地人6人は米軍機に鏡の光で信号を送り、日本軍の司令部・地下壕の位置、兵隊数などを知らせた。彼らを尋問した後、蕃刀で6人とも処刑した。その後、現地人の目がさらに険しくなった（林えいだい、1998、pp. 184～185, 197）。

行軍や退却の際、日本軍の落伍兵は放置されるようになった。例えば、高砂挺身報国隊（第1回）のアルツ・アルバラらにクシム河口に集結命令が出た。2週間で着くという。食糧もなく、かつ日本兵の多くはマラリアとアメーバー赤痢にかかり、次々と落伍したが、各兵士が自分自身のことで精一杯で、置いていくしかなかった。小隊長は日本兵が敵の捕虜となり、日本軍の転戦行動が知られることを恐れ、「歩けない者は撃て（殺せ）」と命じたが、戦友を撃てず、目で別れの挨拶をした。何千人の兵士が動けず、各所から自決の銃声が聞こえた。イリシガイ（第5回高砂義勇隊）は、ウエラク方面に移動開始、ラム河を渡ると湿地帯があり、飢えと病気で落伍したと思われる水ぶくれの死体が沢山浮き、白骨死体も方々にあった（林えいだい、1998、pp. 99～100, 132, 211）、と証言する。

地域によっては食糧不足が極限に達していた。そして、日本軍の中に人肉食が始まった。人間にとって最後の食糧は人間という状況が生み出されたのである。その時のことをルデランは以下のように述べる。1942年11月頃、ギルワ陣地にたどり着いた。だが米豪軍に包囲され、食糧探しも水汲みもできず、餓死寸前になった。クムシ河の河口に集結命令が出た。ジャングルを前進すると、昼夜分かつず連合軍捜索隊の自動小銃の音が鳴り響いた。途中、銃声と共に豪兵が倒れた。すると、日本兵数人が飛び出し、銃剣で豪兵の肉を削ぎ取り、食べ始めた。私は茫然としてその行為を見ていた。すると、日本兵は「お前にはやらない。早く向こうに行け」と怒った。高砂族も首狩りをしてはいたが、殺害した人間の肉を食べたことは聞いたことがない（林えいだい、1998、pp. 82～83）、と。このように、まず日本兵の中で人肉食がおこなわれ始めた。

だが、人肉食は高砂義勇隊員も巻き込んでいった。私が、角板山タイヤル族の黄新輝（第5回高砂義勇隊・分隊長、ロシン・ユーラオ、日本名は「啓田宏」）へのインタビューで確認したところによれば、「人肉食は有名な話」と前置きした後、「実は僕は1回だけ食べたことがある、日本兵に撃たれて死んだアメリカ兵の肉。当時、人間の肉くらいしか食べる物がなかった。僕の友だちが人肉を持ってきたので、炊いて少しだけ食べたことがあるんだよ。美味しくない。酸っぱい」<sup>7)</sup>、と。

すでに日本の敗戦が決定的となった当時の状況について、黄新輝は以下のように答えた。

---

7) 黄新輝氏へのインタビュー、2010年3月20日。

「日本敗戦時、師団長を頭に50人くらいの日本兵が頑張って戦っていたが、『もう負けた。君たちは身体を大切にせい』と言い、陸軍軍曹らは『天皇陛下万歳!』と言って手榴弾で自殺した。ある部分の日本兵は切腹した。あっちでもバーン、こっちでもバーンと、あちこちで自殺した。日本兵は切腹したり、手榴弾自殺をしたが、高砂義勇隊の隊員は切腹も、手榴弾自殺もしなかった。僕たちまで死ぬ必要はないでしょう」<sup>8)</sup>、と。ここから日本敗戦時に日本兵と高砂義勇隊員との行動形態に違いがあったことが分かる。台湾原住民は「日本人・日本兵」に成りきっていたとはいうものの、最後の状況での対処法は異なっていた。換言すれば、「日本人であること」から解放されて、本来の台湾原住民の姿に戻ったともいえそうだ。

では、最後に日本敗戦後の高砂義勇隊員の動向に触れておきたい。まず、ダルパン・ポキリガンは、それまで威圧的であった日本軍上官への怒りを爆発させた。ことの成り行きは以下のようなものである。高砂義勇隊からの逃亡兵5、6人が（帰国船に乗るため？）日本軍の降伏後に出現した。中隊長は怒り、軍刀で斬り殺すといった。私は「戦争が終わったのにどうして戦友を切るといのか」と激しく抗議した。戦争が終わったら日本軍の階級も関係ない。義勇隊員は皆、銃、手榴弾、蕃刀で戦闘態勢をとった。従来、義勇隊員を理由なく殴りつけていた上官は低姿勢となった。帰還のため、台湾基隆まで巡洋艦に乗船した。第5回高砂義勇隊の上野保小隊長は船の中で殴られて、土下座して謝った（林えいだい、1998、pp248～252）。いわば逃亡しなかった義勇隊員も逃亡義勇隊員の気持ちが理解できたのである。したがって、上官の「逃亡」ゆえの「処刑」に真っ向から反対した。敗戦を契機に日本軍の階級も規律も論理も台湾原住民には通らなくなっていたのである。

とはいえ、その心情はそれほど単純ではない。烏来タイヤル族頭目のターナ・タイモ（日本名は「林源治」）の場合は、46年6月基隆港に帰還した。その時、港には誰1人迎える者なく、最初に姿を見せたのは国民政府軍の憲兵であった。敵国日本軍に協力した者は人間の中に入らぬとばかりで、持ち物は没収され、家路についた。台湾語も山地語も、ましてや日本語が通じるはずなく、ここを統治しているのは「異邦人」だと、「敗戦」の実感が迫ってきた（門脇朝秀、1994、pp34、36～39）。日本統治が崩壊し、国民党統治へと大転換していたのである。こうした状況下で、高砂義勇隊員は日本人と同様に「敗戦」を実感したのであった。

なお、一説によれば、高砂兵の「損耗率」は60～70%とも称された。戦後、「戦死公報」が届かない家庭が幾つもあったという（石橋孝、1992、p.284）。高砂義勇隊員や志願兵制による原住民兵士の何人もが戦地で生死不明、行方不明となったものと解せよう。

---

8) 黄新輝氏へのインタビュー、2010年3月20日。

## おわりに

以上のことから以下のようにいえよう。

第1に、日本統治への抵抗力を削ぐため警察による銃取り上げと管理（狩猟期を設定、その時期にだけ銃貸出）がおこなわれた。盧溝橋事件後、高砂義勇隊員や兵士に志願することで「日本国家への忠」を証明できると考え、積極的に募集に応じ、志願した。同時に、このことは、高砂義勇隊は台湾原住民にとっては非武装化から再武装化への再転換の大きな契機となった。その上、台湾原住民は元来、日本人、本島人に比して相対的に身体能力が高く、勇敢、かつ強靱であり、ある意味で軍人的資質に恵まれていたといえよう。戦時期、台湾原住民の本来からの精神的・肉体的な能力が高く評価される状況が生まれた。このことは原住民にとって喜びだった。こうした状況下で、彼らは志願することになるが、それは日本による強制ではなく、頭目による決定であるとして、その主体性、自発性を強調する。このことは、原住民自らが主体性を認識することで、日本人のみならず、本島人による差別構造、それに伴う劣等感からの脱却も目指していたことを意味する。こうして、日本統治という枠内において、「日本人意識」に転換し、地位向上と生存を図ったものといえよう。

第2に、「幻想としての戦場」が台湾における銃後では流布された。初期には高砂義勇隊員で生還できた者も相対的に少なくなく、彼らは台湾に帰還すると、「英雄的物語」や「日本軍の強さ」を語った。こうして、戦場での「英雄的物語」や「活動」は誇張されて伝えられた。戦病死は忌むべきものとされ、あくまでも「戦死」は美学として家族、親族、原住民各部落で語られた。これによって、台湾原住民の銃後の活動は鼓舞され、家庭内では母親などの反対もあったが、当時、それは公にされることもなく、社会構成体全体が出征を讃美し、高砂義勇隊への志願に拍車をかけた。いわば戦意昂揚に利用されたのである。

ところが、第3に、「実相としての戦場」は「幻想としての戦場」とは、全く異なる様相を呈していた。当初、高砂義勇隊は軍夫として搬送から塹壕掘りなどを主におこなっていた。その後、諜報をおこない、兵士と同様に遊撃戦、さらに特攻へと重点が転換していった。換言すれば、高砂義勇隊は軍夫から実際の兵士へと変貌していったのである。その上、戦況悪化と共に極度の食糧不足となり、食糧確保が最重要任務に加えられた。こうして、義勇隊員は多くの日本兵の命を救った。にもかかわらず、戦況は悪化し続け、日本軍からの補給は途絶え、日本兵が次第に衰弱し、病魔に犯され、かつ極度の食糧不足から餓死した。そうした極限の状況下で人肉食へと突き進んでいったのである。それは日本兵から始まり、その後、相対的に食糧を確保できたはずの高砂義勇隊員をも巻き込んでいった。

第4に、日本敗戦時、少なくない日本兵が自決の道を選んだ。だが、高砂義勇隊員は敗戦がなぜ自決と繋がるのか理解できなかった。このように、日本兵士と高砂義勇隊員との間には行動パターンに明確な相違があった。敗戦は意識的にも無意識的にも日本人上官への不満とも結びつき、ある時はそれを爆発させた。また、敗戦は「日本人であること」の

否定と結びついた。その反面、台湾に帰還すると同時に、日本統治から国民党政権に変わった政治体制の下で、日本人が敗戦を感じたと同様、高砂義勇隊員も「敗戦」と実感し、その上、国民党政権下では「日本軍協力者」としての烙印を押されることになる。

(きくち かずたか・愛知学院大学)

### 【史料】

『朝日新聞—台湾版—』

『興南新聞』

防衛省防衛研究所 S18-1-3 (アジア歴史資料センター C01005306500) 「台湾人軍夫の身分取扱に関する件」 1943 年 7 月

台湾総督府臨時情報部『部報』

### 【参考文献】

台湾史研究部会編『日本統治下台湾の支配と展開』中京大学社会科学研究所，2004 年

石橋孝『旧植民地の落し子・台湾「高砂義勇隊」は今』創思社，1992 年

土橋和典『忠烈抜群・台湾高砂義勇兵の奮戦』星雲社，1994 年

門脇朝秀編『台湾 高砂義勇隊—その心には今なお日本が—』あけぼの会，1994 年

林えいだい『証言 台湾高砂義勇隊』草風館，1998 年

中村ふじゑ「霧社事件から高砂義勇隊まで」『中国研究月報』第 476 号，1987 年 10 月